

メディアを創る「メディア実践論」 木村知義

木曜日2時限
241教室

地域プロジェクト発表祭 2013. 12. 22

2013年「メディア実践論」何をめざしているのか

メディア環境の大きな変化 ⇒ 誰もが情報の発信者になれる時代の到来 ⇒ ハイブリッド・メディアへ！！
時代の流れをとらえて企画、取材から表現までを、実践的に体験、習得する「メディア実践論」へ！！

3本の柱：①映像ドキュメンタリーをつくる ②「多摩大学学生ジャーナル」の取材、編集 ③多摩地域の情報発信環境の調査、研究とプランニング：メディアリテラシーを実践的に鍛え、時代を生きる力へ

メディア表現へ！その意味は

○現代のメディアにおける表現の広がり

：音声表現＋映像表現＋活字による表現

：既成メディアとWebの連携・融合

○メディアリテラシーを高める

- ・メディアを主体的に読み解く力
- ・メディアの仕組みを知り、活用する力
- ・メディアを通じてコミュニケーションを深める力

○問題意識を深め、ものの見方、考え方を鍛える

○社会の現在(いま)を読み解く力を獲得する



ペンとカメラを手に
街に、野に出よう
君は何を見るのか！

何を、どう学ぶ

■メディア表現のための学習プログラム：映像制作ワークの流れを例に

- ・企画を立てる(リサーチ・データの収集⇒提案⇒再リサーチ)
- ・番組の企画提案を書く(企画・提案書の書き方)⇒提案会議で議論
- ・構成する(構成のたて方)⇒構成表を書く
- ・取材の実際
 - ・カメラワークの実際
 - ・インタビューの実際
 - ・レポートの実際
- ・編集する
- ・制作の仕上げ(ナレーションと字幕)⇒完プロ
- ・視聴・情報発信と事後検証 ⇒ **取材・制作・発信の日常化へ！！**



■2008年、プロジェクトゼミのスタートはラジオだった、それは、なぜ？！

- ❖ことばによる表現がすべての基礎！⇒ことばを獲得する、表現を豊かにする
- ❖「人の心と社会をまったく一つの共鳴室に変えてしまう」(M. マクルーハン：メディア学者)
- ❖語るメディアとしてのラジオ：**メディアはメッセージだ！**(キミは何を伝えたいのか)

■2012年秋から「多摩大学学生ジャーナル」の取材、編集にも展開

すでに江間、渡辺、五十嵐、中川、小形、阿部、佐々木、小島、芹澤、吉野の10人が執筆

■Something New !

誰も見たことがないものから、誰もが見ているが、見えていなかったものの発見へ…
さあ、発見の旅へ！現場に立って考える、「歩行する思考」・・・

地域プロジェクト発表祭
2013. 12. 22

「メディア実践論」三段跳び「夢」計画

[1] **ホップ**・2008年～10年

音声番組の制作へ

「メディアを創る＝メディア発信法」
インターネットラジオでの発信を想定して
音声番組の企画・制作に挑戦

企画する、提案する、その前提として
「何か」を発見する力を鍛える。
⇒「発見！多摩大学」をテーマに企画の
開発へのチャレンジから歩み始める。

リサーチそして企画から取材、編集、
完プロまで、番組制作の基本について
理論と実技について実践的に学ぶ。
PD(プログラム・ディレクター)の「仕事」
とはどんなものかを知る。

大学から視野を広げて、企画を考える。
取材交渉、出演交渉など、キャンパス
から外に踏み出して、社会で必要とされる
さまざまな力を獲得する。

- 「学長に聞く」企画案から学長を囲む
学生との「対話」に発展(清水)
- 「アニメーターの夢と現実」企画では
「虫プロ」での現場取材を実現。その発展
として「日本のアニメ戦略を聞く」で
文化庁の担当者にインタビュー(中川)

[2] **ステップ**・2011年～13年

映像制作へのチャレンジ

映像ドキュメンタリー制作に挑戦

土台・基礎：音声番組の制作

+

多摩地域の情報発信環境の
調査・研究⇒コミュニティFMにつ
いての調査⇒「FM多摩」の研究

+

「多摩大学生ジャーナル」(活字
媒体)の取材・編集への参画
⇒「メディア実践論」の現場から

ハイブリッド・メディアへ

*米・コロンビア大学 ジャーナリズム
スクール シグ・ギスラー教授

企画力の充実・強化
問題意識の深化
制作力のレベル向上

[3] **ジャンプ**・2014年～

地域を見つめ、地域に貢献

大学発、地域への情報発信
を日常化して、多摩地域に
貢献できる制作活動へ！！

音声番組・映像ドキュメントの
制作を経験して意欲と制作力
の“水位”は確実に向上。
しかし！「私」の関心領域から
踏み出して、広く社会、地域に
目を向けて問題や課題を掘り
起こし、テーマとして取り組む
活動に発展させることが重要。

「夢」実現に向けての課題

1. 企画・制作力の一層の充実
特に、企画を「掘り起こす力」
：問題発見能力を鍛える
2. 制作一情報発信の日常化
3. 学年を継いで、制作力の継承
4. 機材など制作環境の整備
：大学へのはたらきかけ！！
5. 地域コミュニティとの連携

ビデオジャーナリストゼミ 発

消えた遊具の向こうに 団地の歴史と夢を見た

経営情報学部 2年 江間 宏路

「アポロの遊具がなくなった」友人からそう聞いて、慌てて行ってみると、たしかに遊具が消えていた。

日野市百草団地にある「アポロ広場」と呼ばれるその小公園は、子どもの頃いつも遊んだ場所だ。そんな思い出のつまった広場の遊具が消えた事に少しショックを受けた。これをきっかけに、多摩地域のコミュニティの変化と子どもの遊び場の行方に関心をかきたてられプロジェクトゼミの取材テーマにしたのだった。「消えた遊具」の背後を取材してみるとコミュニティのあり方を模索する地域の姿が見えてきた。

アポロ広場は真ん中に檣が立っていてそこから滑り台が腕のように伸び、ネットや砂場が配置されて、子どもにとっては冒険心をくすぐられる楽しい「小宇宙」だった。その檣に付いていた遊具が撤去され、今は腕がもがれたような状態になっている。

遊具が取り外されたのは、平成 20 年度に国交省から出された「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」の「安全基準」を満たしていないという理由によるものだ。当時、あちこちの公園の遊具で事故が起きたことを思い出す。しかし、では何故、檣は残ったのだろう。「アポロ広場」の遊具の撤去を担当した南多摩管理センターを訪ねた。

「アポロの遊具は国の安全基準に満たない、改修も不可能という事で撤去することになった。しかしアポロの遊具は団地のシンボルなので展望台という形で残す事にした」（担当者の鈴木さん）

百草団地の入り口にあるアポロ広場は、季節の祭、夏の花火大会など、住む人にとって大切な交流の場であり、団地のシンボルとして歴史を刻んできた。広場の遊具をどう残すのかは「団地に住む人たちの思いと歴史をどれだけ残せるか」に通じるというのだ。

小さな広場のささやかな遊具だが、百草団地という地域コミュニティに対する住人の深い思いを大事にして展望台として生まれ変わった。そして、アポロ広場の北側に新しい遊具を作るプランがあるとのこと。生まれ変わったアポロ広場に子供たちの夢と歓声があふれる日が待ち遠しい。



アポロ広場の遊具

プロジェクトゼミ「メディアを創る」ではビデオ、音声メディアなどの企画、取材、制作に取り組んでいる。情報の「発信者」として誰もがメディアの主役になれる時代の挑戦だ。現在、男 7 人、女 1 人の「8 人の侍」が奮闘中。夢は大きくビデオジャーナリスト。その取材、制作現場からビッドなレポートをお届けする。

(経営情報学部 客員教授 木村 知義)

ドキュメンタリー制作、 日々格闘

経営情報学部 2年 渡辺 光

「あなたの言うことはわかるが、映像で撮られるのはちょっと…」

この 1 年半、何度この言葉を聞いただろうか。最初こそ、この言葉を聞くたびにえらく落ちこんだものだったが、最近ではこんなことに負けてはいられないと気持ちを切り替えられるようになった。そうは言っても、取材を断られるのは辛いものだ。

私は今、東日本大震災の被災地にかかわるビデオドキュメントの制作に取り組んでいる。主人公は私と同じ福島県出身の多摩大学の学生だ。彼女は 3.11 の日に実家に帰っていて津波で被災したが、ふるさとの復興に関わりたくて来年の 4 月から地元である相馬市で震災復興に関わる仕事に就くことが決まった。まだ放射能の問題も残る福島で、彼女が人生を賭けてふるさと相馬の復興めざす思いと、そこでの葛藤を描こうと思っている。しかし、これは私自身の生き方を問われるものでもある。ドキュメンタリーの制作とはそういう苦しみと格闘を乗り越えてはじめてできるのだということを制作の中で日々学んでいる。

こうしたビデオや音声メディアの作品の制作をめざすプロジェクトゼミ「メディアを創る」を私が志したのは、森達也さんという 1 人のドキュメンタリー作家の作品に影響されたからだ。森さんの作品は、ドキュメンタリーは作り手の主観によって構成されるものであり、ドキュメンタリーに絶対的事実はないという思想で制作されている。だから作り手のものの見方や考え方が問われるのだというのだ。森達也との出会いはとても衝撃的だった。そして、いつかはドキュメンタリーを作ってみたいと思うようになった。

見ている分には自分にもできそうだなと思ったドキュメンタリーの制作は思うようにはすまない。取材をお願いしたいと言っても、応じてくれる人はとても少ない。OK が出ても当日いざカメラを回そうとした時に断られることもしばしばだ。まだまだ終わりが見えそうにないが、これが私の作品だと言えるドキュメンタリーをつくるため、今日も格闘は続く。



津波で土台しか残っていない相馬市原釜地区 (2012 年 8 月)

ビデオジャーナリストゼミ 発

多摩ニュータウンへの “遠い道”

経営情報学部 3年 五十嵐 大喜

「郊外の洒落たニュータウンに住む“翔んでる妻たち”の不倫ということばかりが話題になったが、私が描こうとしたのはそういうことではない。ニュータウンという時代を映す鏡を通して、豊かになるとはどういうことか、そこで家族とはあるいは地域とはということを見つめようとしたのだ…」

「ウルトラマン」生みの親のひとりでもあり、「キン妻」という言葉が生まれ一大センセーションを巻き起こした「金曜日妻たちへ」（1983年、TBS）や「毎度おさわがせします」（1985年、TBS）など、時代をリードするテレビドラマを数多く生み出した飯島敏宏氏の静かに語る声が教室に響いた。プロジェクトゼミで実現した「飯島敏宏監督を囲む会」でのごとだった。

私が学ぶ地元、多摩地域で大きなテーマとなっている「多摩ニュータウンの再生」に関心を抱いて企画として取り組みなかと考えはじめたころ「ホームカミング」という映画に出会った。かつては人々のあこがれの街でもあったニュータウンが少子高齢化の波に押されて「高齢者の街」となってしまった。その街に活気をとりもどそうと、定年を迎えた高田純次演じる主人公が地域の祭りを盛り上げるために奮起するという人情ドラマである。この「街と人生再出発の物語」は町田市の住民延べ1000人がエキストラとして協力して出来上がった映画でもある。その映画の監督が飯島氏だった。

「多摩ニュータウンの再生」をテーマにするなら飯島氏の話を知りたい。そんな思いをつめた気持ちで氏に会いに行った。そこから実現したのが「飯島敏宏監督を囲む会」だった。

昭和31年に大学を卒業してTBSに入りディレクターとしてのスタートをきったこと、木下恵介プロダクションでドラマ制作者として実績を積み「木下プロ」の社長、会長までつとめたこと、私のあこがれたウルトラマンシリーズ制作の裏話など。自分史を語りながら戦後のテレビドラマの変遷、そこでの人々の暮らし、特に「住まいと地域」という切り口で人間を見つめる目、そしてなによりも制作者としての情熱。感動し、触発されたことを挙げればきりが無い。しかし、いちばん大事なことは時代と人間をどうとらえるのかということだった。

建物の老朽化、年寄りばかりの街……。これが高度成長期に東京のベッドタウンとして人気を博し、先端をゆくモダンな住宅として“羨望”の的となった、さらに時代のライフスタイルまでも創った多摩ニュータウンの現在の姿だ。この「多摩ニュータウンの再生」を、私の企画でどう描くのか。

「五十嵐は発掘した素材をどうまとめるのだ！君のメッセージはなんだ！」

教室では先生の激励まじりの厳しい叱咤が続く。

「飯島氏を囲む会」は実現させた。それで少しばかりの自信も芽生えた。しかし、まだまだ「多摩ニュータウン」への道は遠い。



飯島敏宏監督を囲む会

プロジェクトゼミ「メディアを創る」ではビデオ、音声メディアなどの企画、取材、制作に取り組んでいる。情報の「発信者」として誰もがメディアの主役になれる時代の挑戦だ。現在、男7人、女1人の「8人の侍」が奮闘中。夢は大きくビデオジャーナリスト。その取材、制作現場からビビッドなレポートをお届けする。

アキバ発、 挫折と試練の向こうに

経営情報学部 4年 中川 健人

秋葉原の交差点に立つと子供のころの思い出が懐かしくよみがえる。いまはパソコンや家電量販店のビルが林立する街になっているが、私が父に手を引かれて通ったころの秋葉原は小さな部品や工具類を並べる店がいっぱい連なる不思議な場所だった。

ジャンク屋。何に使うのかもわからない部品を売る店を大人たちがそう呼んでいることを知ったのもその頃だった。父の買い物に付き合った後、ご褒美に近くの交通博物館に連れて行ってもらうのも楽しかった。その秋葉原はアキバへと変貌を遂げる。

アニメにゲーム、コスプレ、メイド喫茶の街としても知られ休日には若者であふれる。歩行者天国で賑わう交差点に25歳の青年がトラックで突っ込み、ナイフで歩行人を次々に刺すというショッキングな事件が起きたのは2008年6月の日曜日のことだった。

こうした「秋葉原」の変容を自分史と重ね合わせてビデオ化しようと企画した。昔からの変遷を知る秋葉原電気街振興会の方へのインタビューも交えながら、長い間見つめてきた秋葉原は自分にとってどのような場所であるのかを描こうと考えた。しかし通えば通うほど「秋葉原」が語りかけることの膨大さに戸惑うばかりだった。教室で学んだ「現場に立つ重さ」が身に染みてわかった。

苦しんだといえば2年生の時の企画を思い出す。自分の趣味でもあるアニメをテーマに「夢に挑戦するアニメーターは、いま」という企画を立てて録音構成の取材に挑んだ。しかし、学生が取材したいという要望を受け入れてくれるところなど簡単には見つからない。伝手も何もない10社以上のアニメ制作会社や数校の専門学校に「お願い状」を書く日々が続いた。挫折の連続で暗い気持ちにもなった。そんな時だった、「壁にぶつかることが大事なのだ。社会に出たら思うようにいかないことが毎日の毎日だ。いま君はかけがえのない経験をしているのだ！」と木村先生から叱咤されたのは。そしてついに世界の手塚治が創設した「虫プロダクション」への取材の風穴があいたのだった。感動！続いて秋学期には「守れ！日本のアニメ ～日本のアニメ文化振興のために～」と題して文化庁の担当者へのインタビューも実現した。何かを創るということは壁にぶつかることなのだ。だから挫折は怖いものではないということを知った。これから社会に出ていく私のいまの自信のすべてはこの「挫折の日々」の経験にあるといっても過言ではない。

そして秋葉原。ロケ取材した折角のビデオ映像が、なんと保存していたメディアがクラッシュして消えるという災難に！残っていたiPhoneの写真構成でなんとか完成目指して、いま最後の仕上げに入っている。いやはや私の試練に終わりはない。



駅から見た秋葉原の様子

〈プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

生かされた者への想いと未来を伝えたい ～私の東日本大震災～

経営情報学部 2年 阿部 彩

この春休み、故郷宮城県石巻市に戻った。去年4月、大学進学で上京して以来一年ぶりの帰郷だ。東日本大震災の被災地である石巻では、がれきの片付けが急ピッチですすんでいた。しかし、更地ばかりがひろがる荒涼とした風景に、まるで別世界に迷い込んだような気分に襲われた。故郷で迎えた震災2年目の3月11日は、「あの日」と打って変わって明るい日差しの降り注ぐ穏やかな空が広がっていた。しかし、いままあのときの記憶が鮮明によみがえる。故郷は懐かしいと感じながらも、切ない感情がこみ上げてくる。

あなたは、1日にいくつの選択をするだろうか。例えば進路、家族、恋愛。登下校で聞く音楽や明日のおかずといったものも小さいが選択の1つだろう。人は、毎日たくさんの「選択」の中で生きている。しかし、命に関わる「選択」というものはそう何度も直面するものではない。「3.11」での死者は約16000人、私の友人もその1人だ。彼女はまず他人の事を考える、優しさの中に強さを持った人だった。私はそんな彼女の優しさに何度も何度も助けられた。そんな彼女だからこそ「3.11」が起きた時もまず自分より家族の事を考えた。彼女が最期に選び取った「選択」は家族を救うことだった。

身体の自由の利かない人を、涙を飲んで置いて避難したという話は被災地には数え切れないほどある。私がもしその立場だとしたらその選択にどう答えを出しただろう。置いていかれる人たちの、生きることのできる人への「生きてほしい」という想いが切ないほどわかる。しかし、彼女は最期の最期まで家族を救出しようとした。結果彼女は命を落としてしまったが、私は彼女が最期に選び取った「選択」を今でも誇りに思っている。彼女の強さと優しさはこの先生きていく中で絶対に忘れない。東日本大震災、それがどんなに悲しい記憶となったとしても、それがなければ今自分がここで毎日生きていることはない。もし私があのときの彼女の「選択」を否定してしまったら、それは彼女自身の生き方、彼女のすべてを否定していることになる。彼女だって自分の「選択」が間違っていたなんて思っていないだろう。

今私はプロジェクトゼミ「メディア実践論」でドキュメンタリー制作と取り組んでいる。ここに参加して一番伝えたいと思ったことは、「想い」と「未来」だった。震災被害の規模や現状を伝えることも、とても大切だ。しかし、私は、「私の東日本大震災」をテーマに、生かされたものへの想いと未来を、私の制作するドキュメンタリー映像で大勢の人々に伝えたいと思う。

人生に間違った選択はない。それが、東日本大震災を越え、今ここにいる私の答えだ。

この先辛い事はたくさんあるだろうが、彼女のように自分が正しいと思う「選択」を選び取り、彼女の方まで精一杯強く生きて行こうと思う。故郷で撮ってきた素材映像の編集と取り組みながら、そんな思いが胸の奥にこみ上げる。



宮城県石巻市 2013年3月11日

Fun to Drive again

経営情報学部 3年 小形 希

2012年10月2日。夜明けとともににはじまるイベントをめざし、深夜の高速道路を走っていた。イベントのロケ取材申し入れは断られていた。当然のことだったかもしれない。突如名も知らぬ学生が、ゼミのワークとして取材させてくれと、ただ熱意だけで頼み込んだのだから。打つ手が完全に消えたときは諦めることも考えた。だが、せめて現場の雰囲気だけでもと赴いたのだ。照明に照らされた小田原アーリーナの駐車場。なんとすでにイベントの参加者が集まり始めているではないか。胸が熱くなった。「スポーツカーはカルチャー」である。そんなコンセプトで発売された新型スポーツカー「トヨタ・86」ユーザーのイベントがあと数時間で始まるようしていた。

世の中数多くある趣味の中で、車を愛する人たちはそう多くはない。今や移動手段として車を所有していることが当たり前という価値観の中に我々は暮らしている。だから車といえば、車内が広く、値段も手ごろ、維持の容易さが9割以上を占めるという現状だ。だがしかし、ここで聞きたい。移動や荷物運び、維持のし易さだけが車の価値だろうか。もっと根底にある、車をはじめて運転した時の感動、楽しさをもう忘れてしまっているのではないか。

車を「移動の手段」とするか「相棒」とするか、ここに生じる車に対する認識の差はそう小さくはない。そんな時代に、スポーツカーは運転する者すべてに運転する楽しさ、そこでの「夢の時間」というものを改めて教えてくれる。エンジンをかけ1m進めばそこにあるのは間違いのない非日常の空間であり、自分だけの特等席になる。厄介なのはこれを言葉で言い表せないということと、世間一般にはなかなか理解されないことだ。しかし、不思議なことに“こちら側”であれば言葉不要の空間が生まれる。

目指したイベントはトヨタ主催の「86S J001 HAKONE」。トヨタ86の初オーナーズミーティングであり、なんと箱根ターンパイクを1日中貸し切って開催されるスペシャルなイベントだった。そして、ロケ取材はできなくとも、イベントの現場に立って、そこで起きることを自分の眼で見ておきたいと駆けつけた私に、なんと現場で取材の許可が下りたのだった。切なる思いが通じた感激がイベントの華やかさを一層盛り上げるようになった。マスメディアの取材クルーのテレビカメラとともに大学から借り出した小さなビデオカメラが並んだのだった。前代未聞の風景だっただろう。移動も取材クルーの一員として動くことになった。

この「トヨタ86」を軸に集った人々の群像を追ったビデオの編集作業は、現場での発見と感動、そして思いをもってぶつかれば道はひらけるという感激の追体験だった。それ以上に、私がこのビデオ制作のスタート時に抱いた、車はカルチャーだという思いをあらためて深くすることになった。時代は変わり、自動車産業とユーザーの意識もこれからきつと変わっていくのではないかと、そんな期待を胸に抱いている。



「86」イベント

〈プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

秋田県大曲発・伝えたい大輪の花火と「ふるさと」のころ
～故郷の「ハレ」の日、「ケ」の日～

経営情報学部 2年 佐々木 農

大輪の華が夜空に咲き、ドーンという破裂音がこだまのように響き渡る。そして見る人の歓声が湧き起る。夏の夜の花火はどうしてこんなに人の心を感動させるのだろうか。

花火大会は全国で数えきれないほどひらかれるが「大曲の花火」は特別だ。全国の花火師が腕を競う真剣勝負の花火大会なのだ。決められた規格の花火で競う「課題玉」と「自由玉」、さらに音楽とのコラボレーションなど趣向を凝らした「創造花火」の一大ページェントが繰り広げられる。それだけではない。花火といえば夜というのが通り相場だがここでは「昼花火の部」もある。

今年も全国から76万人もの人が訪れた。会場の大曲のある秋田県大曲市の人口が8万8千人余りだから、市の人口がこの日一日で一挙に10倍にも膨らむ。大曲にとって「いつもではない、特別な一日」になるのだ。そんな大曲の「ハレの日」の表情をとらえて作品を制作してみようと思いついた。

私は、3歳の頃から現在まで、ほとんどの夏休みを秋田県増田町（現在の横手市）と大曲市（現在は大曲市）で過ごしてきた。だから「ふるさと」と言っても過言ではない場所なのだ。記憶では、子供のころは見渡す限り田畑が広がるばかりだったが、時代の移り変わりのなかで田畑は様々な工場や会社の手に渡り、ビルの立ち並ぶ風景へと変わった。そして町村合併で大曲市となったが、私にとっては、というより多くの住民にとっては昔ながらの「大曲市」という地名に捨てがたい愛着がある。

そんな、ごく普通の地方都市にすぎない大曲は、花火大会とともにまったく違う顔に変貌する。花火見物のための桟敷が生まれ、道路規制や屋台の準備がはじまりテレビ局の取材クルーの姿があちこちに見えるなど、浮き立つようなざわめきの街に変わっていく。今年も会場のゲートから雄物川の河川敷につくられた桟敷にたどり着くのに40分もかかるという賑わいになった。しかし一方では、地方都市のご多聞に漏れず、地元の若者たちは東京などへ出てしまい、少子高齢化の波が押し寄せている。

夏休み、私が大曲に滞在するのは、土地に暮らす人達からみればほんの「束の間」と言うべき短い時間だが、東京で暮し、学びの日を重ねる私にとって、幼いころからの記憶を形づくった大曲は、そして夏の夜の夜空を彩る大輪の花火は、私のこころや感性と切っても切れないものになっているのではないと思う。「メディア実践論」の企画を立てることになって気づいたその「仮説」を確かめに、今年はビデオカメラを手に入れた。そして街を歩いた。

大曲の「特別な一日」と普通の日、つまり「ハレ」と「ケ」を通して風土と人のつながりについて見つめてみたい、そんな思いを胸に夜空の花火を仰ぎながら立ち尽くした。途中、一時突然の強い雨に見舞われたが、こうした私の思いを冷ますことはなかった。

カメラを通して見つめた「ふるさと」、大曲の夏は終わった。

さて、私の「夏の発見」が、人のこころを動かすものになるかどうか、いよいよ制作本番の秋を迎える。



大曲の賑わい



夜空に輝けスターマイン

もっとゆっくり、もっとゆったり・・・
—インドネシア・バンドン 2013年夏

経営情報学部 2年 小島 拓弥

とうとうバンドンにやってきた。インドネシアの首都ジャカルタから東南に200キロ、西ジャワ州の州都だ。標高700メートルほどの高原にあり熱帯にしてはしのぎやすい。多民族国家インドネシアにあってバンドンにはスダ族が多く暮らしている。また、多くの大学や研究機関があることから学園都市としても知られている。さらに、戦後日本が国際社会に復帰する一歩を踏み出した「バンドン会議」で知られる地でもある。そのバンドンへの旅には高校時代に出会ったインドネシアの友人との再会という目的があった

私は過去3回インドネシアを訪れているが、初めてインドネシアに出かけたのは高校2年の11月であった。私が学んだ静岡の高校は2年生になると全員研修旅行に出かける。私はインドネシア行きを選んだ。そこで、現地の高校生に出会った。それから3年、彼らも大学生になっている。「メディア実践論」の企画を考えることになって、当時出会った高校生のその後を追うことを思いついた。彼らがどんな眼差しで日本と日本人を見つめているのか、私たちがアジアの人々と共に生きるとはどういうことなのかを考えてみたいと思った。特に彼らの何人かは日本語を学んでいるということも私の関心を引いた。

今回再会したのは2人。一人はバンドン市内の大学に通う女子大生、もう一人はジャカルタに出て日本語を勉強している。しかしここで「思わぬ出来事」に遭遇する。私がインドネシアを訪れた時はイスラム教の断食月、ラマダンの時期にあたっていたのだ。そのため彼女たちに会えたのは帰国の4日前。ロケ取材の目算は大きく外れた。普段、宗教について意識することのほとんどなかった私にとってはカルチャーショックというべきもだったが、あらためて多様な文化、価値観のアジアということについて考えさせられた。

バンドンの街に立って多くの発見があった。どの人に会ってもみんな明るい!

現地でインタビューした何人かに一番に言われたことは「日本人は静かすぎるネ」ということだった。一般にインドネシア人は穏やかで怒らないことで知られているが、摩擦を避けていわば「防衛本能」からできるだけ静かにしようとする日本人とは異なり、インドネシアの人々は、摩擦や揉め事を起こさないように明るく振る舞う術を心得ているように感じる。穏やかというより心の器が大きいというべきではないかと思う。また、スダ族の人たちは親戚同士で寄り添って住み、家族間の絆がとても強い。普段から周りの人たちと助け合いながら暮らすことが日常化しているのだ。

バンドンを訪れて垣間見たインドネシアは、私たちにもっと心にゆとりを持って、ゆっくり暮らすことを考えてみてもいいのではないかと語りかけているように感じた。それは、現在の日本と日本人のあり方、さらには私たちがアジアと共に生きるとのことへの大事な示唆と言えるのではないかと思った。

私の4度目のインドネシア、バンドンでの「ひと夏の体験」だが、問題は我が企画の制作だ。こればかりは「もっとゆったり」とはいかない。なんとも悩みの秋だ。



バンドンの街の風景



高校時代に出会ったインドネシアの友人との再会

〈プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

わが愛しのエフエム多摩！
～地域を繋ぐコミュニティFMの復活を夢見て～

経営情報学部 2年 吉野 翔

2010年3月31日、エフエム多摩は閉局した。「コミュニティラジオ」というものをご存知だろうか。限られた範囲の地域に電波を出して、地域密着型の番組を放送する、地域に根づくFMラジオ局だ。多摩大学があるこの多摩地域にも、コミュニティラジオ局があった。それがエフエム多摩だ。地域の企業や大学がスポンサーとなり、番組を制作し、市からの支援によって補って貰った。しかし、広告費の減少により赤字が続き、放送機材の更新ができず、放送を続けることが困難になってしまった。閉局時の累積赤字は4500万円に上った。

私は多摩で生まれ、多摩で育った。小学校、中学校ともに「多摩」という言葉が入り、大学も多摩大学。なによりも私が愛する多摩なのだ。そしてプロジェクトゼミ「メディア実践論」。はじめは映像制作について学ぼうと考えていたのだが「コミュニティメディアの調査、研究」も活動の柱になっていることを知り、かつてこの地域で親しまれたエフエム多摩も研究対象になることに気づいたのだった。昔聴いていたエフエム多摩の閉局に大きなショックを受けた私は、もし、私たちの手で再建することが出来るなら、そう考えると鳥肌が立った。

今時何故ラジオなのか、という疑問を持つ人も少なくないだろう。それは、私の人生と大きく関係している。私は小学5年生で学校に行けなくなった。所謂、不登校という状態で、中学3年生の夏まで続いた。はじめがあったわけでもなく、学校に行けなくなった理由は今では思い出せない。その間、人との関わりを避け、ずっと家にいる生活が続いていた。そんなときラジオの音が耳に飛び込んできた。声だけが、あたかも自分がそこにいるかのように、はっきりと感情が伝わり、自然と笑顔になっている。毎日のようにラジオを聴いた。気がつくと、人と会話をしたいと思えるようになっていた。そして、中学3年の夏、学校に戻った。ラジオによって明るく話することができるようになり、友達もできた。私の人生はラジオによって救われたのだ。

しかし、なぜコミュニティFMに目を向けるのか。

私を揺り動かした一番のできごとは、2011年3月11日に起きた東日本大震災だ。あの時私は高校の授業中で、多摩にはいなかった。携帯の充電切れによって家族との連絡が途絶え、翌日朝帰宅するまで一切の情報が入らなかった。やはり一番の心配は家族の安否だった。後日、被災地でのコミュニティFMの活躍を目にし、耳にした。地域の情報を密に放送することができ、家族の安否まできめ細かくラジオが伝えている。そこに住む人が切実に必要としている地域の情報をひたすら伝えることができるのは、コミュニティFMだけだった。あの日多摩にもコミュニティFMがあれば、そう私は考えた。

私は多摩が好きだ。昔、嫌悪感を抱いた同級生や迷惑をかけた先生と、もう一度繋がりたい。多摩に住む人の役に立ちたい。人との繋がりの大切さを多摩の人に思い出してもらい、多摩地域を繋ぐ放送局を私たちの手で復活させたい……。

とても難しく時間のかかるテーマだ。しかし、コミュニティメディアの調査、研究をきっかけに、私の夢は広がるばかりだ。



ヒアリングで訪れたFM西東京で



当時のエフエム多摩のステッカー

大人も子供になれる国「こどもの国」

経営情報学部 2年 芹澤 誠

まわりの木々が色づきはじめ秋の訪れを告げている。前に訪れたのは新緑の季節、こどもの日だったが、歓声とざわめきがこだまする休日の賑わいは変わらない。「こどもの国」は子供だけでなく大人も純粋な気持ちに選んで遊ぶことのできる不思議な力をもつ場所だと、ここに立つたびに思う。

私は横浜市青葉区に15年前から住んでいる。近所におすすめの場所はあるか、と聞かれれば私はためらいなく「こどもの国」を挙げるだろう。ここは多摩丘陵の自然を生かした約100万平方メートルの広大な「遊び場」である。休みの日には親子連れ、カップルなど様々な人が集まる。

「こどもの国」は今でこそ人々の憩いの場であるが、戦時中は旧日本軍が保有していた最大規模の弾薬製造貯蔵施設だった。敗戦後は田奈弾薬庫として米軍に接収されるが、日本に返還された後、1959年の当時の皇太子のご成婚を記念して、国費や民間からの寄付によって跡地を整備し、1965年5月5日に「こどもの国」として開園した。

ゲートに入ってまず目に飛び込んでくるは、大人も子供も一心にアスファルトの地面にチョークで絵を描いている姿だ。いつも感動を覚える光景だ。ここに来ると、大人と子供を隔てるものが一瞬にして消え、一人のヒトのこころを取り戻すことができるのではないかと思う。

ここには数えればキリがないほどさまざまな施設がある。広場にはじまり牧場、100メートルもある滑り台などの遊具、ボート乗り場、遊歩道、夏にはプール、冬はスケート場が開く。牧場ではポニーに乗ることもでき、牛の乳搾りの体験、小動物とのふれあいの場も設けられている。また時々バター作りや焼き物の体験もできる。休日はこれらの場所はいつも大賑わいだ。

私がこの「こどもの国」に広がる世界を映像構成で描いてみたいと思ったのは、ここが思い出深い場所だからである。小学校の遠足では毎年のようにここへ赴き、友人達と走り回り、プールで泳いだりした思い出もある。だが中学、高校と時間を経るにつれて「こどもの国」は遠い場所になっていった。とともに、どこかで失いそうになっている感性やこころのゆとりというものがあるのではないかと感じるのだった。プロジェクトゼミという機会を生かし、私のこころの故郷ともいえる「こどもの国」を見つめなおしてみようと思ったのだ。

取材のため何度か「こどもの国」へ足を運んだ。遊歩道を散歩している時、子供の視点と大人の視点ではこどもの国での過ごし方が少し変わるのだと気づくこともある。しかし、いつでも大人も「子供」になれる、そんな「ときめきの場所」であることに一切変わりがないことに安心するのだった。

スライド構成による映像制作もいよいよ終盤。「こどもの国」を映像にすることは、子供の頃の思い出と大人になりつつある現在の私を見つめることにほかならないと痛感する日々だ。



「こどもの国」ゲート前景：親子連れでにぎわう「こどもの国」



チョークで絵を描く姿：子供も大人もチョーク絵に熱中